

日本社会心理学会会報

232号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 広報委員会 (担当常任理事：内田 由紀子)

2023年12月1日

日本社会心理学会第64回大会 開催

期日：2023年9月7日(木)・8日(金)

会場：上智大学四谷キャンパスおよびオンライン (Zoom) 大会準備委員長：樋口 匡貴

1. 参加者数 577名 (予約参加 405名・当日参加 172名)
2. 発表件数 口頭発表 41件、ポスター発表 225件、大会シンポジウム 1件、自主企画ワークショップ 4件、ECR 企画発表 12件
3. 発表取り消し 4件

樋口 匡貴

日本社会心理学会第64回大会は、9月7・8日に無事に開催することができました。またオンライン質疑応答システムでのディスカッションも10月12日に完全にクローズとなりました。ご参加いただいた皆様、誠にありがとうございました。大会2日目の9月8日には関東地方への台風接近もありましたが、当初よりオンライン開催の日としておりましたので(ご参加の皆様が無事に帰宅できたかどうかは少し心配ではありましたが)、混乱することもなく無事に開催できました。

対面・オンラインを組み合わせたハイブリッド形式での開催、準備委員会に開催校以外のメンバーを多数含めるプログラム委員会方式での運営など、色々と新しい試みも行いましたがいかがだったでしょうか。新しい試みをめぐっては、会期終了直後より大会ホームページに準備委員一同からの[ごあいさつ](#)を掲載させていただいておりますので、あわせてご一読ください。みなさまが快適に研究活動を楽しめる場所を提供できたのであれば、それで十分に幸せです。

大会運営にあたり、会員の皆様をはじめ多くの方に大変にお世話になりました。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

(ひぐち まさたか・上智大学・第64回大会準備委員長)

大会参加記

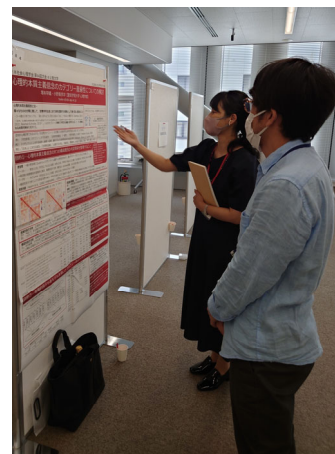
学会参加記「私の宿題」

塚本 早織

上智大学で開催された社会心理学会への参加を終えて、記憶が新たなうちに宿題を終わらせようと思ってこの文章を書いています。このような機会をいただき、ありがとうございます。今回私は、1日目は愛知から東京へ日帰りでオンサイト参加、2日目は大学の研究室からオンラインで参加させていただきました。そして今、2日目の17時です。学会を2つハシゴしたような充実感と日帰り旅の疲労を抱えています。

コロナ禍4年目の学会ということですが、大会運営委員の先生方や学会関係者の方々の創意工夫とご尽力に頭が下がる思いです。個人的には、対面とオンラインのハイブリッド形式での開催は、「2種類選べるパスタランチ」のように美味しくお得な企画で、まさに「良いところ取り」だったと感じました。日々の生活で向き合う様々な不確実性を鑑みると、オプションが複数呈示されることで得られる安心感は計り知れず、準備委員会の先生方のおもてなしの心を感じました。ちなみに私は、子どもの日常にさほど影響しない形で参加ができた2日目のオンラインは大変ありがたかったです。

確証バイアスを割り引いて読んでいただきたいのですが、大会での私の収穫を述べさせていただきます。価値観や信念、態度を扱う研究を実施する中で、それらが社会で共有され、維持されるプロセスに関心があります。特に、文化的に優勢とされる価値観や信念を推測し、それに一貫する行動をとることで、心と文化が相互構成的に影響し合うという「共有信念」の面白さを再確



認しているところです。今大会では、個人の態度そのものを問うだけでなく、多元的無知や価値観の「メタ」認知を変数として扱っている研究にいくつも出会いました。同じ社会で共に暮らす他者の信念の推測は、心と社会をダイナミックに捉えるために欠かせない視点であろうことを再認識しました。以上のことは、学会会場で議論やご発表の補足から得た情報であったため、お話しさせていただいた先生方に心より感謝申し上げます。

もうひとつの収穫は、大学院生や若手研究者のご活躍がとても眩しかったということです。ポスター発表で分からないことを「分からない、知らない」と質問してくださったり、口頭発表ではパソコンの画面脇に表示されるビッグネーム（文字通り、表示されるだけでインパクトのあるネームのことです）をものともせずにご発表や質疑応答をされたりする姿勢から、大いに刺激をいただきました。確か、私自身が初めて参加した学会では、ビッグネーム相手に、正直に「知らない」と言ってしまうという若気の至りを発揮してしまったのですが、嫌な顔をせず大変丁寧に説明していただいた覚えがあります。（初めて参加した学会で村田光二先生に、「ドクター・スミス課題って何ですか？」と質問しました。）立場を超えて、知らないことを知らないと言いつける、寛容で建設的な文化の持続性を感じました。本大会での『参加者バッジ』の取り組みは、こうした文化の維持に役立っているのだと確信しました。そして、知らないことが多すぎることを恥ずべき中堅の年代になってしまった自分に焦りを感じます。

前半の文章では、ハイブリッド形式での実施は美味しくお得な企画だったという感想を述べたのですが、学会参加記を書き進めるうちに、私個人は学会会場で自然発生的に生まれる自由なコミュニケーションを欲していることを付記しておきたくなりました。例えば私は、あの時の村田先生の驚きと興味が混じりあったような表情（誤記憶かもしれませんが、笑ってくださっていました）を今でも覚えていて、その経験は間違いなく現在の私の研究や教育活動の糧になっています。コミュニケーションにおける様々なシグナルを通して知識や態度が共有される感覚や、取るに足らない感想を述べ合う中で思考を整理するという体験は、研究室で1人オンライン参加をしているだけでは得られない学会「参加」の特典なのだと感じています。

大会参加記の提出はこれでできそうなのですが、本当の宿題はこれからです。本当の宿題とは、学会大会で交流させていただくことで具体的に得た知見を自分の研究活動に生かすこと、学生に伝えること、そして研究知見をアウトプットして情報の発信者になること、学会を盛り上げる議論ができる研究を実施すること！がんばりましょう、自分。

（つかもと さおり・愛知学院大学）

大会参加記

清水 佑輔



大会前日の院生リーグに向けた準備から大会終了日まで、9月初旬の1週間はあっという間に過ぎていきました。秋の学会シーズンも終わり、ようやく落ち着いた今、あの1週間を振り返ります。

<院生リーグ> （写真左）院生リーグとは、毎年の大会前日に院生会員が中心となって開催している「プレ学会」のような研究会です。本年度は東京大学で院生リーグを開催し、自分は幹事を務めさせていただきました。院生リーグでは、教員のいない場で自由に意見交換を行い、研究に関する悩みを気軽に共有できる場が用意されています。特に本年度は、社会心理学とはやや異なる分野を専攻する学生や多くの学部生に対して積極的に宣伝した結果、約100名が参加し、大盛況となりました。大学や学年の壁

を越え、多くの交流が生まれるきっかけとなっていたら幸いです。運営にご協力いただいた幹事グループの皆様、この場を借りてお礼申し上げます。

<ECR 企画> 本大会では、Early Career Researchers を対象としたインフォーマルなセッションが設けられました。ポスター発表では、指名制指定コメンテーターの先生方から丁寧なコメントを頂く機会がありました。ほとんどの学生にとって、他大学の先生方から自分の研究にコメントを頂く機会は少なく、大変貴重なセッションだったと感じます。指導教官とはまた異なる角度から頂く指摘はいずれも刺激的であり、自分の博士論文執筆を大きく加速させるものでした。またライトニング・トークでは、オンラインを通じて多くの先生方に自分の研究内容を紹介することができました。我々ECRのために、有意義かつ刺激的な企画をご用意いただいた準備委員会の先生方、大変ありがとうございました。

<大会全体を通して> 本大会では、私の博士論文の一部の研究について、博論とは異なる分析手法を用いて発表しました。分析手法はもちろん、研究計画の欠陥や今後の展開について、多くの先生方から対面でコメントを頂くことができました。また、院生リーグや ECR 企画で知り合った学生がポスターを見に来てくれることも多く、同年代のネットワークの重要性を改めて感じました。本大会は対面でのポスター発表者が非常に多く、会場の賑わいが非常に印象に残っています。細かい研究テーマは違えど、社会心理学を究める多くの先生方、学生と交流できたことは今後の自分の宝となるに違いありません。来年度の大会でさらに有意義かつ質の高い議論ができるよう、引き続き精進してまいります。



(しみず ゆうほ・東京大学)

松井豊先生・蓮花一己先生が名誉会員に推戴

日本社会心理学会 2023 年度総会にて、松井豊先生、蓮花一己先生が名誉会員に推戴されました。日本社会心理学会に対するこれまでの多大なる貢献に心より感謝申し上げます。この度の推戴に対し、両先生よりコメントを頂戴しております。以下に掲載いたします。

名誉会員に推戴されて

松井 豊

このたびは名誉会員への推戴をいただき、ありがとうございます。西田公昭会長をはじめとする関係者のみなさまに感謝いたします。

内田由紀子先生から「推戴されての一文を」とのご依頼をいただいて、どのようなことを記せば良いか迷い、先輩方の文章を拝読しました。先輩方は学会でのご活躍や、これまでの研究歴や多くの方への感謝を記されていました。

自分とは振り返ると、理事を 8 年、監事を 4 年務めました。が、いずれもヒラの立場でしたので、あまり芳しい成果を上げていません。これまでの研究も先輩方のご活躍と比べると、会報に記すほどのこともなさそうです。

何を書くべきか迷ったのですが、今進めている研究のことを書かせていただきます。

第一は、RISTEX（浦光博先生が研究統括）からの委託研究で「職場内の孤独・孤立」研究を進めています。筑波大学働く人への心理支援開発研究センターの研究スタッフと一緒にデータを取り、現在は尾崎由佳先生のご協力を得て、スマホ・アプリの開発に取り組んでいます。研究スタッフが、職場の孤独・孤立に関する面白い知見を発見してくれていて、楽しかったのですが、アプリの開発になったら、とたんに壁に直面し、苦戦しています。

第二は、畑中美穂教授と行っている「コロナ禍の救急隊員のストレス」の研究です。コロナ禍においては、医療関係者への感謝が全世界で広く表明されました。しかし、感染者に最初に接する救急隊員の負担やストレスに関しては、あまり関心が向けられていません。このプロジェクトでは三回の全国調査を行い、救急隊員の心的負担やストレスに対する社会の理解を得たいと研究を展開しています。第三回調査の結果は、本年 11 月に発表される見通しです。

第三は、「コロナ禍の保健所管理職のストレス」研究です。地方公務員安全衛生推進協会からの委託で、親しい研究者と面接調査と質問紙調査を行っています。コロナ禍における保健所職員の実態調査はいくつか行われ、その心的負担の大きさが報告されています。しかし、職員を管理する管理職にかんしては少数事例の活動報告しかありません。このプロジェクトでは、管理職の活動の実態と心理的負担を明らかにし、今後起こりうる感染症流行に備える対策を探っています。調査は全国の保健所を対象にしましたが、回収率は 50% を越えました。この回収率の高さをみても、保健所管理職のつらい体験が推察できると思います。この研究結果は、来年 3 月に発表される見通しです。

こんな社会の隅っこを突つつくような研究をやっています。学会でも隅っこで発表していきますので、お聞きいただければ幸いです。

(まつい ゆたか・筑波大学名誉教授)



名誉会員推戴への感謝

蓮花 一己

名誉会員に推戴いただきましてありがとうございます。1972 年（昭和 47 年）に、私は京都府の高校から大阪大学人間科学部に進学しました。高校の時に、新書版の社会心理学の本を読んだことがきっかけで、俄然、社会心理学が勉強したくなり、関西で学べる大学を探していました。高校 2 年のある時、担任の先生から、「蓮花君が探していた学部ができるよ！」と声をかけられ、京都の友人から都落ちなどという声をかけられつつ、人間科学部に進学しました。しかし、とても残念だったことに、当時の人間科学部に社会心理学の先生はまだ着任していませんでした。

人生に分かれ道があるとすれば、1973 年に大学 2 回生のゼミ選択で、私は産業心理学のゼミを選んだことです。次の年に、著名なグループダイナミックスの研究者である三隅二不二教授が人間科学部に着任されるので、この決定がその後の私の人生を決めたと感じています。その後、大学院進学から妻との結婚、ドイツ留学、奈良の大学への就職など、目まぐるしい人生でしたが、もしも一年早く三隅先生が着任されたら、さらにバリバリの社会心理学者になっていたかも知れませんし、逆に、研究で燃え尽きて全く違う進路に進んでいたかも知れません。

大学院では、交通心理学の分野に進みましたが、この分野は社会との関わりが強く、事故分析や交通教育など、ありとあらゆるテーマで警察など行政とのつながりができます。時として、研究をしているのか、社会貢献活動をしているのか分からなくなるくらいです。理論などは脇において、事故現場に行き回って歩き回り、路上駐車をしているドライバーにインタビュー調査をして時に叱られ、暴走族の若者と面談をして時には盛り上がることもありました。

大学院から技官、助手と大阪大学にお世話になりましたが、そんな中で、社会心理学への関心が薄れることはなく、車同士あるいは車と歩行者のコミュニケーションをテーマとして、空いている時間を活用して細々と実験を続けていました。ある時、京都大学の木下富雄先生から電話があり、私のカーコミュニケーションの研究に興味があるということでした。木下先生も、車の合図の中でクラクションを「クラクションランゲージ」として研究されていました。自分が編集している本で、一章をこのテーマで書いてみないかという若手には本当にありがたいお申し出を受けました。また、木下先生から関西社会心理学研究会 (KSP) を紹介され、参加するようになり、多くの先生方と知り合いになれたことが貴重な財産になりました。

さらに、関西大学などの非常勤講師の仕事を通じて、高木修先生や林英夫先生たちと交流できる機会を持てたのも幸せでした。高木先生が監修された「シリーズ 21 世紀の社会心理学」の第 10 巻『交通行動の社会心理学』（北大路書房）の編集を担当できたことも嬉しい驚きでした。関西の社会心理学の先生方や院生たちは、お酒を嗜む会が大好きで、私と気が合いましたので、今でも可能な限りお付き合いを続けています。

そのころから社会心理学会に参加するようになり、1987 年（昭和 62 年）に帝塚山大学に着任した頃には、交通心理学会よりも社会心理学会に熱心に参加していたようです。中でも機関誌『社会心理学研究』の編集委員を何年か務めたことは思い出深い経験でした。大坊郁夫先生や吉田俊和先生の下で、機関誌編集委員会の仕事が大変勉強になりました。他に所属している学会でも、査読をすることが多いのですが、良く書けていると思われる論文でも、社会心理学会の編集委員会では大変厳しい査読がなされるのを見て、これは大変だなと感じた記憶があります。後日、その機関誌に自分の論文が採択されて掲載されたことは本当に嬉しかったです。

車の運転も、ハンドルやアクセル、ブレーキのような同じ道具を用いても、ベテランと初心者には明確な違いがあります。アメリカでの標語に、“A man drives, as he lives.” というものがあります。訳すと、「運転が示すあなたのお人柄」でしょうか。人生を生きることと運転することは、全く異なるようで、似ていることも多くあります。「赤信号、みんなで渡れば怖くない」の同調行動やモデリング、あおり運転のような攻撃行動など、交通行動の中に潜んでいる社会心理的な行動様式を探し求めることは楽しい限りです。

思い起こせば、社会心理学会では、知り合いとワイワイすることの方が多く、貢献度よりも迷惑度の方がはるかに高かったかと反省するばかりです。とくに近年は大学管理職の仕事を引き受けてしまい、学会参加すらなかなかできていません。名誉会員への推戴に見合う仕事をしてきたのかと自問自答をする毎日です。今後は心を入れ替えて、毎年の大会準備委員会にも差し入れを持参して、若手や中堅の方々とも交流を深めたいと思っています。今後の社会心理学会のご発展を祈念しております。

（れんげ かずみ・帝塚山大学客員教授・名誉教授）



第 25 回(2023 年度)日本社会心理学会賞選考結果のお知らせ

本年度の日本社会心理学会賞は、奨励論文賞 1 編、出版賞 2 編が選出され、第 64 回大会総会で発表、総会後に授賞式が行われました。各賞をご紹介しますとともに、受賞者のコメントを掲載いたします。受賞された先生方、誠におめでとうございます。

優秀論文賞

該当なし

奨励論文賞

水野 景子・清水 裕士

「社会的ジレンマ状況における罰の逆効果の検討：Remove the sanction パラダイムを用いて」（第 38 巻第 3 号）

本論文は、社会的ジレンマ状況で協力を促す方法としての罰がもつ逆効果に着目したものである。罰の導入は罰が存在する間は協力を高めることが示されているが、罰を取り除いた後の人々の協力を低下させる可能性が考えられる。これは、罰の導入に関わる重要な問題である。本論文は、特に罰の行使に行使者の意思が反映されない場合には、罰が取り除かれた後に非協力が増加するという仮説の検証を目指した研究である。先行研究の知見を整理し、立てられた研究計画はよく考えられており、分析方法も明確な形で事前登録した上で実験が実施されている。

残念ながら仮説を支持する結果は得られなかったが、先行研究で認められた罰の逆効果がなぜ生じなかったか、逆効果が起こる限定条件を含め丁寧に考察が行われている。再現性の問題を踏まえると、仮説が支持されなかった研究の知見をどのように生かすか、ということとはとても大きな意味があるが、本論文は入念な計画、事前登録、データ等の公開によりこの分野の研究に大きく貢献していると評価できる。論文全体の完成度も高く、奨励賞にふさわしい論文と評価された。

出版賞

石井 宏典（著）

『都市で故郷を編むー沖縄・シマからの移動と回帰』東京大学出版会

沖縄の一集落出身者を一人一人訪ね歩いたフィールドワーク研究の集大成である。沖縄の集落、大阪のメッキ工場、那覇の市場、さらにはフィリピン・ダバオにまで足を延ばし、場所の共有をつうじて相手との関係を構築し、質の高い参与観察や生活史の聞きとりを著者はおこなった。30 年以上にもわたる重厚な調査から得られた知見は、個人史と時代史の交差として人間性をとらえ、共同性の生成に洞察をあたえるものとなっている。その価値は社会心理学のみならず複数の学問領域で高く評価されるであろう。地道に足で稼いだ懐の深い研究成果であり、出版賞にふさわしいと選考委員会は判断した。

山田 一成（編著）

『ウェブ調査の基礎：実例で考える設計と管理』誠信書房（共著者：江利川滋・増田真也・坂上貴之）

精密な論理と厳密な実証に裏付けられたウェブ調査方法論研究である。編者の研究をはじめとして、ウェブ調査の特徴を実証的に検討することにより、質の高いデータ収集につながる知見をたくさん報告している。議論の組み立てが論理的に緻密である点は、社会心理学徒の範になるものといえる。一般読者向けではなく専門家向けの高度な学術書であり、専門家が選考する本学会出版賞にふさわしいとの結論に達した。なお、分担執筆による書に出版賞を授与することはこれまで少なかったが、本書は出版賞に値する内容をもつと選考委員会は判断した。

選考委員

委員長 結城 雅樹

理事 五十嵐 祐・大江 朋子・工藤 恵理子・田中 堅一郎・辻本 昌弘・宮本 聡介

会員 浅野 良輔・白岩 祐子・縄田 健吾・日比野 愛子

受賞コメント

奨励論文賞受賞のコメント

水野 景子

この度は日本社会心理学会優秀論文賞を賜りまして、大変光栄に存じます。このような名誉ある賞をいただけるとは思ってもいなかったため、ご連絡をいただいたときには感動と喜びでいっぱいになりました。ご多用のところ、審査に携り、私たちの論文を評価してくださった選考委員の先生方に心よりお礼申し上げます。

論文掲載に至るまでの審査の過程で、エディター、レビュワーの先生方からいただいた貴重なフィードバックにも感謝いたします。仮説の導出までの過程が不十分で説得力に欠けていた点や、方法に関する具体的な記述が不足していた点など、的確なご指摘をいただき、論文の質を向上させるための大幅な修正を加えることができました。また、高い検出力を必要としていた事情で、本研究においては多くの方に実験参加のご協力をいただきました。貴重なお時間を使って私たちの研究にご協力賜りましたことに、この場をお借りして改めてお礼申し上げます。

本研究では「罰の逆効果」、すなわち集権的な罰システムが社会的ジレンマにおいて導入された後に廃止されると、罰がなかった場合よりも協力の程度が低下するという仮説を、事前登録を行った上で検討しました。結果はいわゆる null result で、罰を導入すると協力が一時的に増加するものの、廃止した後は統制群と有意差がない水準に戻ることを示されました。事前登録により仮説、方法、分析方法までほとんど書けていたため、「問題」、「方法」、「結果」のセクションは比較的スムーズに執筆できましたが、得られた結果から何を考察できるのかが大きな困難となりました。その点について、レビュワーの先生から、結果の解釈に関して言及できることには限界があるとしながらも、考察の追記を提案していただきました。そこで、本研究が null result であることを留意しつつ、検出力が十分に高い研究であったことをふまえ、罰の逆効果が起こりうる具体的な状況や逆に起こりにくい状況について考察を加えることにしました。本論文が、社会的ジレンマ問題解決の一助として、また、仮説が支持されなかった研究の一例として、読者の皆様にとって興味深いものとなれば幸いです。

この受賞を励みに、今後も社会心理学分野の更なる研究の発展に寄与できるよう、精進して参ります。この度は誠にありがとうございました。
(みずの けいこ・関西学院大学)



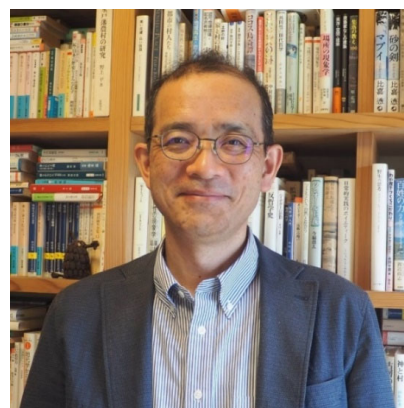
出版賞の受賞にあたって——長期的フィールドワーク研究のなりゆき

石井 宏典

このたび、長年のフィールドワークの成果である『都市で故郷を編む—沖縄・シマからの移動と回帰』（東京大学出版会）を出版賞として選定いただき、大変有り難いことと思っております。選考委員の先生方がお時間を割いてご吟味くださったこと、ならびに、各地のフィールドでお世話になった方々のご厚情と先達の学恩に深く感謝申し上げます。

今からちょうど 30 年前の 1993 年、本研究の第一歩を刻んだ論文「職業的社会化過程における「故郷」の機能—生活史法による沖縄本島一集落出身者の事例研究」に学会賞が贈られ、フィールドワークの取り組みを励ましていただきました。そのときの授賞理由にはこう記されています。「この論文の問題意識そのものは新しくもないし、画期的なものともいえないがこの研究者が徹底して人間を「観察」「理解」するために沖縄の民家に住み、また大阪のメッキ工場で働きながらというフィールドワークの手法をまっとうに選んだ勇氣と努力が評価された。しかもこの研究者の目は、マクロの変数、つまり社会変動の過程との関係をも見据えており、…（中略）…多くの研究課題が示唆されて」いる（『社会心理学研究』第 9 巻第 1 号）。当時、私が学んでいた研究室では、1960 年代前半に着手された下北半島出身者の職業的社会化過程を追跡する長期的研究がひとつの大いなるモデルとして折りにつけ語られており、人びとの営みを歴史的文脈に位置づけて考察することは、当然身につけるべき研究の基本姿勢でした。ともあれ、ようやくまとめることのできた今回の成果が、かつてかけていただいたご期待に応えるものとなっていることを切に願っています。

本書は、1920 年代から現在までの約百年という期間を視野に収めながら、特定の地域社会に定位して、近代の産業化にともなう社会変動のなかを人びとがどのように生きてきたのか、その軌跡を追っています。具体的には、沖縄本島北部に位置する備瀬（びせ）というひとつのシマ（沖縄ではムラをシマと呼びます）から、生活の糧を求めて国内外の各地—戦前期大阪の紡績工場、戦中期のフィリピン・ダバオの麻農園、戦後の大阪のメッキ工場や那覇の衣料品市場など—に、稼ぎに出た人びとの歩みを



なぞり、社会心理学の立場からの考察を重ねています。シマのつながりを頼りに出郷した人たちは、移動先の状況に応じてあらたな共同のかたちを編み出し、身を寄せ合いながら生きてきました。本書の課題は、そうした過程を個々人のライフサイクル（人生）と時代史とを交叉させながら記述し、とくに共同性の生成という観点から考察することにあります。

最初の訪問から 35 年目を迎え、フィールドの方々との付き合いは今も続いています。ただ、こうしたなりゆきは当初、私自身もまったく予想していませんでした。本書を味読してくださった旧知の間柄の方に「どうしてここまで続けられたのですか」と問われ、とっさに、「私のような見ず知らずのよそ者を迎え入れ、一緒に飲み、食べ、語らってくださった方々がいたおかげです」と答えました。訪問先の人たちと交われたことが嬉しくて、ふたたび教えを請うために足を運ぶ。再会を重ねるうちにやがて、相手はこちらの来訪を待っていてくれるようになる。そんなサイクルを飽くことなく繰り返してきたのです。一連の研究は、こうしたかかわりあいのなかで把握できたことを捉え返して記述し、考察する作業でした。このような関与をとおしての観察や聞きとりの場合、研究者が認識できる世界の様相は相手とのかかわりの質に応じて変わってくる面があるはずです。この本では、こうした関係性の変遷とフィールドワークのなりゆきを積極的に書き込んでいます。

さて、本書には、『根の場所をまもる一沖縄・備瀬ムラの神人たちと伝統行事の継承』（新曜社、2020 年）という、対をなす成果があります。両者を重ね合わせることで、近代の社会変動の渦中でシマの人たちが、シマと移動先において編み出してきた共同のかたちを浮き彫りにすることが目指されています。そしてこの一対の仕事は、近代における達成と喪失の双方を吟味し、これからの道を模索するための一助になることを願いながら書き進められました。あわせて手にとっていただけましたら、幸いです。

（いしい ひろのり・茨城大学）

出版賞を受賞して

山田 一成

この度は栄えある出版賞を賜り、大変光栄に存じます。編著者として執筆者を代表し、心より御礼を申し上げます。

本書『ウェブ調査の基礎』は、Web 調査のなかでも利用頻度の高い「公募型 Web 調査」に焦点を合わせ、その有効利用を考えるために企画されました。といっても、本書は確立された標準の手続きを解説した教科書ではありません。サブタイトルに「実例で考える設計と管理」とありますように、本書は、設計時に必要となる指針やパラデータを、試行錯誤の結果も含め、多くの方々と共有し、これからの survey のあり方を考えることを目的として出版されました。Web 調査の利用については、今なお議論が必要とされていますが、今回の受賞が貴重な機会となって、多くの方々に今一度、survey と、方法論と、基礎研究の大切さを思い出していただけることを、心から願っています。

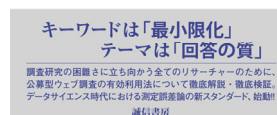
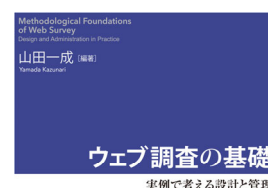
そうした本書の執筆者は、編著者を別にしますと、執筆順に、江利川滋先生（株式会社 TBS テレビ）、増田真也先生（慶應義塾大学）、坂上貴之先生（慶應義塾大学名誉教授）の 3 名です。なお、坂上貴之先生は本年 3 月に急逝されたため、本書の受賞をお伝えすることが叶いませんでしたが、坂上先生も、きっと、今回の受賞を大変喜んでくださっていることと存じます。また、本書と基礎研究のこれからを、ずっと、見守って下さることと存じます。この場をお借りして、増田先生、江利川先生とともに、坂上先生のご冥福を心よりお祈り申し上げますとともに、改めて、これまでの坂上先生のリーダーシップに、厚く御礼を申し上げます。

なお、本書の刊行にあたっては、多くの方々のお力添えがありました。研究会やシンポジウムで、有益な情報をご教示くださった先生方。注文の多い特殊な調査を構築し、管理してくださった調査会社の方々。出版事情厳しき折にもかかわらず、本書の出版を快くお引き受けくださった誠信書房の方々。本書がそうしたの方々のお力に支えられていることは言うまでもありません。そして、それとともに、決して忘れてはならないのが、Web 調査に参加してくださった大勢の回答者の方々です。そうした方々も本書の協力者ですので、今回の受賞の意義と意味が、そうした匿名の方々にも何らかの形で伝わるように、引き続き、尽力せねばと思っております。

英語圏では survey methodology や measurement error の研究が盛んで、Couper (UM) や Tourangeau (Westat) をはじめ専門家も多く、学術雑誌やハンドブックも続々と刊行されています。日本でも、そうした英語圏の動向に立ち後れることのないように、今後この分野の研究が、今以上に盛んになることが期待されています。そして、そうした状況のなかで、本書が、調査研究の困難さに立ち向かう base のひとつとなることを、執筆者一同、心から願っています。

この度は、本当に、ありがとうございました。

（やまだ かずなり・東洋大学）



大淵憲一先生・瑞宝中綬章受章

本学会名誉会員の大淵憲一先生が、令和 5 年秋の叙勲（2023 年 11 月 3 日発令）で瑞宝中綬章を受章されました。瑞宝章は、公務等に長年にわたり従事し、功績を挙げた方に対して授与されるものです。大淵先生のこれまでのご研究、ご活動の業績が高く評価されたものです。大淵先生、おめでとうございます。

『社会心理学研究』掲載論文

第 39 巻第 2 号（2023 年 11 月刊行）

【原著論文】

- 松本良恵・李楊・新井さくら・井上裕香子・清成透子・山岸俊男
陰謀論信奉と信頼行動との関連：二次分析による検討
浅野良輔・吉澤寛之・松下光次郎・笹竹佑太・酒井翔・吉田琢哉
子ども用セルフコントロール尺度の作成と妥当化：小中学生を対象とした検証
村山綾・三浦麻子・北村英哉
新型コロナウイルス感染禍とシステム正当化
木田千裕・矢田尚也・池上知子
社会的支配志向性が身体障害者に対する支援的態度に及ぼす影響
縄田健悟・池田浩・青島 未佳・山口裕幸
チームワークにおけるチーム・バーチャリティ 2 側面の相反する関連性：職場のテレワークはチームワークにどのように影響するか
辻本 昌弘
間接的抵抗について
橋本博文・前田楓・山崎梨花子・佐藤剛介
ヘルプマーク利用者に対する援助意図の促進因および抑制因の検討

日本社会心理学会 第 11 回春の方法論セミナー 開催について（速報）

日本社会心理学会主催の第 11 回春の方法論セミナーは、以下の通り実施します。今回は学会活動委員会と編集委員会の共同企画として、論文査読と論文の書き方についてのセミナーを行います。セミナー講師や内容詳細、申し込み方法については、追ってお知らせします。

日時：2024 年 2 月 29 日（木）13 時～ （休憩挟み 17 時頃まで予定）
場所：大正大学（東京都豊島区西巣鴨 3-20-1）（＋オンライン同時配信予定）

編集後記

今回の広報誌では 64 回大会の記録に始まり、受賞の喜びの言葉など、とても刺激にあふれた文章が多く、編集していて大変楽しかったです。特に名誉会員に推戴された松井先生・蓮花先生の文章を拝読していて、研究者の生き様、姿勢というもののや、研究者ならではの困難や楽しみなども伝わってきました。是非若手研究者の皆さんにもじっくり味わっていただきたいと思います。

私自身は学内用務と重なり大会に参加できずとても残念だったのですが、臨場感あふれる参加記からは、大会で多くの人たちが集まることの良さを再認識しました。学会関係者の皆様のますますのご活躍を祈念しています。良い年末年始をお過ごしください。

（内田 由紀子・広報担当常任理事）